REPORT 3

特定非営利活動法人

わははネット
“こだわり”を忘れずにパートナーシップを

（子育て支援基金　地方分　平成12、15年度）

DATA
〒760-0042　香川県高松市大工町１-４
TEL　087-822-5589
FAX　087-816-5582

「子育てタクシー」という言葉を聞いたことはないでしょうか。その生みの親が「わははネット」です。〝香川の子育てもっと楽しく！〟をモットーにする、「わははネット」は地元企業とのパートナーシップを築き、さまざまな子育て支援を行っています。

中橋恵美子理事長

1 「わははネット」のきっかけと活動

「わはは」とは「輪母」。理事長の中橋恵美子さんが母親同士の情報交換、ネットワークをつくろうと1998（平成10）年にはじめた子育てサークルがその前身です。さまざまな事業を手がける「わははネット」の主要な事業は次の４つ。

① 香川の子育て応援情報誌「おやこDEわはは」の発行
② 携帯に香川の子育て情報が届く！「わははメール」の配信
③ まちかど子育てホッとスペース（子育て広場）「わははひろば」の運営
④ 全国子育てタクシー協会事務局の運営

2 香川の子育て応援情報誌「おやこDEわはは」の発行

中橋さんは、結婚後、ご主人の仕事の都合で移り住んだ茨城県つくば市で二人のお子さんを出産。知らない土地での育児は大変で孤独だったと言います。その後、出身の香川県に戻りましたが、地方都市での情報不足を痛感しました。そのため、新聞の投稿欄を利用して仲間を集め、東京発ではない香川県の地元情報を届けようと、情報誌「おやこDEわはは」を1999（平成11）年に創刊。今では、地元企業からの広告収入をもとに、年４回、毎号2万5000部を香川県内の子育て家庭が出向くスポットへ無料配布するまでに成長しました。

3 携帯に香川の子育て情報が届く！「わははメール」の配信

「おやこDEわはは」の発行を通じ、明らかになってきた課題もありました。情報誌を読む機会のないお母さんにいかに情報を伝えるか、明日行われるイベントを紹介したいという場合などの即時性をいかに確保するか、などを考えた末に、生まれたのが「わははメール」です。携帯電話を通じ、情報誌だけではカバーできないリアルタイムの情報や、子どもの月齢や性別などに応じた情報を発信しています。

4 まちかど子育てホッとスペース（子育て広場）「わははひろば」の運営

「おやこDEわはは」の創刊、「わははメール」の配信と続きましたが、次第に情報発信だけでは解決できない、お母さん同士の情報交換が必要であることに気がつきます。「あそこの幼稚園のPTAは大変……」「あそこの産婦人科って……」など、情報誌には載せられない、けれどお母さんたちにとっては気になる、そんな〝口コミ〟の情報が伝えられ双方のやり取りができる「井戸端」をつくりたいという思いから、2003（平成15）年に最初の「子育て広場」がつくられました。今では、坂出市に1か所、高松市に2か所の広場があります。

5 全国子育てタクシー協会事務局の運営

「子育てタクシー」は、2004（平成16）年に

「わははネット」が地元タクシー会社に提案してはじまりました。これも、もともとはお母さんたちの「井戸端」がきっかけ。「小さな子どもと一緒に乗るといやな顔をされた」「破水して乗ったら、シートを汚すなと言われた」などの声を受け、タクシーというインフラを活かして母親のサポートとするばかりでなく、タクシー会社の社会貢献的なイメージの向上にもつながることをアピールし、事業化しました。現在68社が加盟するまでになっています。具体的なサービスは、乳幼児と保護者が同乗する「かんがるーコース」、子どもが1人で乗る「ひよこコース」、急なトラブル・夜中の移動などの「ふくろうコース」の3つ。

6 基金事業のその意義

ところで、「わははネット」は平成15年度に「子育て支援基金」の助成を受けています。子育て広場の運営などさまざまな子育て支援事業を行う県内外の団体を視察、調査するとともに、そこで見つかった課題や事業運営のヒントなどを「子育てネットワークステーション通信」と題する16頁の小冊子にまとめ、広く情報提供と、子育て支援団体同士のネットワークづくりができたそうです。

基金の意義について、中橋さんは「次のステップに進みたいときに足がかりがないと踏ん切りがつかない。基金に育てられた団体は多いはず」と言います。一方、助成は単年度で終了することが多く、どんなによい事業であっても助成が終わってから、それらのランニングコストを捻出するのは大変です。「助成中に、その団体が自立できるような支援も同時に提供してほしい」とアドバイスをもらいました。

7 パートナーシップの意味

「わははネット」が手がける子育て支援は、実はさまざまな企業とのパートナーシップを得て事業化されました。前頁掲載の事業のうち、①の情報誌では地元企業からの広告収入、②の携帯電話を通じて情報を配信するシステムはある大手のIT企業がボランティアでつくりました。④は言うまでもありません。「企業とのパートナーシップ」は、事業の継続性の課題を抱えることの多い市民活動にとって、大切なキーワードであるように思います。

では、なぜ「わははネット」は企業とのパートナーシップを模索したのでしょうか。そのきっかけやポイントとはどのようなものなのでしょう。

「わははネット」の前身である子育てサークルを立ち上げる際、「行政のことを知らなかったし、行政からのサポートもなかった」と中橋さんは言います。そして、そのことが「よかった」とも。「わははネット」の活動の原点は情報誌の発行です。手弁当ではじめたそれは、当初置いてくれる場所もありませんでしたが、徐々に読者を増やしていき、3年目には制作費を広告収入でまかないフリーペーパーとすることに成功します。それは、「わははネット」が〝当事者性〟を失わなかったからです。お母さんが知りたい情報、お母さんにフィットする情報を載せる（○○公園は石畳だからベビーカーだと大変、日陰が少ないからお弁当ではない方がよい、など）、また広告についても自分たちが買ってよかった商品、使ってよかったサービスに限るといった〝スタンス〟をもっています。それは「こだわり」といってもよいかもしれません。このことが読者の信頼を得て発行部数を増やし、結果企業からの広告が集まり、さらに発行部数を伸ばすという好循環につながりました。

現在では配布場所も保健センターや図書館、小児科や産婦人科医院にまで広がり、それは企業にとっては普段であれば広告宣伝をできないような場所でも、自社の商品・サービスをアピールできるというメリットになっています。なお、②では、企業側はアンケートなどを通じ、商品・サービスの購買者であるお母さんたちへのマーケティングや商品開発ができますし、④では企業イメージの向上による売上のアップにつながっています。

このように、「わははネット」の事業は、お母さん

子どもも安心して夢中になって遊びます

たちはもちろん、企業ともよい関係をつくっています。「こだわり」を忘れずに、企業側にも具体的なメリットを提供できるかどうかが、企業とのパートナーシップを築くうえでのポイントなのでしょう。

さらに、企業とのパートナーシップを築くには次のような点も大事なポイントです。それは、相手方、つまり企業の土俵に乗ることです。たとえば、約束した発行日、ページ数や体裁等の仕様を守る、これは当たり前のことのようですが、実際は資金が集まらなかった、時間がなかったなどの理由から、〇〇情報誌を出すといって結局出すことができなかったという場合も多いのではないでしょうか。それでは、企業の信頼を得ることはできません。ビジネスをするうえで、「約束を守る」というのは最低限のルールです。また、企画書やプレゼンテーションなど、企業側のもつ〝言語〟を学ぶことも大切です。このように、企業と対等の立場に立つことによって〝施し〟ではない、パートナーシップを築くことができます。

みんなで一緒にお昼ごはん

ママと一緒に親子遊び

8 自分たちの事業はなにか?

さて、先ほど企業とのパートナーシップを考える上で、「当事者性」について触れました。また、中橋さんは行政のサポートがなかったことを「よかった」とも言っています。その意味を伺うと、市民活動を考える上で大切な示唆を与えてくれるように感じました。

「ミッション」という言葉があります。市民活動を考える上で大切なキーワードです。つまり、「自分たちの事業はなにか?」ということです。社会が抱える課題を何とかして解決したいと思う人は多いでしょう。しかし、「助成金があったらできるのに」や「〇〇が一段落したら……」、たとえば「子どもが小学生になったらはじめよう」と、アイデアや想いを実行に移すのに二の足を踏んでいる場合もまた多いのではないでしょうか。中橋さんは言います。「(助成金が)なくてもやらないといけない、その(助成金がない)ときどうするのか? 絶対にやるんだという気持ちが大切」「乳幼児期の課題は、乳幼児をもつ人が一番よくわかっている。小学生になったらまた別の課題が生まれてきて、結局乳幼児期の課題は置き去りにされる」。

市民活動の原点がここにあるように思います。「わははネット」は、子育てをするお母さんたちの抱える悩みや課題を解決する手助けをしたい、子育てを楽しくしたいという想いが出発点になっています。その想いを、そして「絶対にやるんだ」という気持ちを忘れなかったからこそ、多くのお母さんたちから支持され、企業からの信頼を得てきたのでしょう。

最後に、中橋さんに今後の展望について伺いました。「いつも同じことを聞かれるのよね」と笑いながら、「事業を広げよう、大きくしようと思っているわけではありません。困っている人が目の前にいるから、じゃこれをやろうと考えてきただけです。困っていることがあれば、次にこれをやろうとなるでしょう。ただ一つ言えるのは、〝ワークライフバランス〟といっても、中小企業にとってその取り組みは大企業ほど簡単ではありません。中小企業には中小企業なりのやり方を、子育て家庭の求めているものや、その事業に子育てという切り口でのプラスアルファのヒントを提供して、企業にとっても、お母さんたちにもよいWin-Winの関係をつくれるような仕組みを考えていきたいですね」と教えてくださいました。

◆◆◆◆◆

取材の最中、終始楽しそうにお話をしてくださった中橋さん。その中橋さんとスタッフが支える「わははネット」は、市民活動を考える上で大切な原点を教えてくれたように思います。